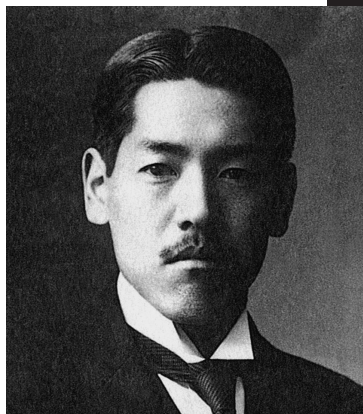


星島 二郎

—日本の民主主義を—

先導した政治家—

学校法人白梅学園理事長 小松隆二



星島の印象と白梅学園との関わり

星島二郎といえは、すらりとした細身で長身、そして一貫して自由と民主主義の立場から政治や法曹の世界で活躍した人という印象が強い。とりわけ大正デモクラシーのさなかに、嵐に抗して民衆本位の司法や政治の必要を訴えた姿、また女性など差別を受けている階層に対する保護や権利の付与を先導的に訴えた姿が脳裏に焼き付いている。

星島は、第一次世界大戦直後の時代にあつては進歩的・革新的であつた自由主義的法律家のなかでも、穏やかなが

ら理想を失わずに、誠実に生きる若手として期待を集めていた。白梅学園とのかかわりも、実はそのような困難の多い運動に従事している厳しい時代に遡るのである。

星島と白梅学園の関係は、就任した役職などを通して見る限り、けつして長く深いものではない。にもかかわらず、短期間とはいえ理事長の職まで引き受けていること、さらに白梅学園関係者との人間的な結びつき、学園の応援団としての役割を見ると、その関係は長く深い。理事長に就任したのは、その背後にいる応援団の位置から表に出た僅かの期間に過ぎないのである。

それだけに、自由や民主主義のために時には命がけで生き、闘かった大正デモクラシー時代以来の長年の同志であった穂積重遠、牧野英一、古島一雄、そして小松謙助らの理念や思い出がどこかに息づいている白梅学園の理事長就任は、星島にとつても何かしら懐かしく心温まるものであったと思えるのである。

星島の足跡

星島二郎は、一八八七(明治二〇)年一月六日、岡山県児島郡藤戸村(現倉敷市)に生れた。生家のある藤戸は倉敷市の東南に広がり、岡山ともそう遠くはないが、実家はその地の大庄屋を務めた旧家であった。父は貴族院議員も経験した謹一郎、兄は義兵衛。次男の二郎は「にろう」と読む。

星島は地元で中学まで修学し、六高を経て東京帝国大学法科大学独法科に入学、一九一七年に卒業した。

卒業後、弁護士を開業。郷土の大先輩犬養毅の秘書を経て、一九二〇年、三二歳で衆議院議員に立憲国民党から岡山県第2区で立候補、当選。この年、クリスチャン仲間、戦後社会党最初の首相に就任する片山哲らとともに東京・日比谷に中央法律事務所を開設。低費で相談をうけるなど民衆本位の民主主義・自由主義の立場で市民運動を展開した。クロボトキン研究に端を発する森戸辰男(当時東京帝

大経済学部助教授)の筆禍と処分問題のかかわる森戸事件も担当、言論・学問の自由を擁護した。また大正デモクラシーの一翼を担う『中央法律時報』『大学評論』などの機関誌や雑誌を刊行、編集にあたった。

実は星島が社会教育協会、そして白梅学園とかかわりを持つきっかけは、この法律事務所において与えられた。星島と片山は、彼らの運動のよき理解者・支援者の一人となる小松謙助とそこで知り合う。小松の東京日日新聞時代であったが、取材などの仕事を超えて支援者としてよく顔を出した。小松にとつては明治の頃平民社の理想と運動に共鳴した若い時代の夢と息吹が、第一次大戦後はデモクラシーに共鳴・支援する生き方で蘇ったのである。

これを機に、星島も、小松とは終生交際を続け、社会教育協会の設立と維持にあたっては、片山とともに小松を支援したし、また白梅学園にも理事および理事長として協力を惜しまなかった。

なお、星島は、白梅学園には、小松の逝去、そして牧野英一の学長辞任をうけて、一九六二年八月に理事に就任、一九七一年には曾志崎誠二理事長の逝去にともない理事長に就任する(一九七三年までの二年間)。あわせて、社会教育協会と白梅学園の合同葬として挙行された小松の葬儀に際しては、代表して追悼の辞を読むことになる。



星島氏記者会見、就任衆議院議長

話は衆議院議員初当選に戻るが、それ以来、星島は一九六三年の総選挙まで連続一七回当選を果たす。しかし、一九六七年に四七年間という長きにわたる国会議員生活に終止符をうった。この間、立憲国民党、革新倶楽部、立憲政友会、戦後は日本自由党、民主自由党、日本民主党、自由民主党などに参加。あわせて鉄道参与官、司法政務次官、商工大臣、国務大臣(無任所)、民主自由党総務会長、さらには衆議院議長などを務めた。

さらに、多忙の時間をぬってキリスト教関係の活動にも協力したし、また絵画、俳句などの趣味も楽しんだ。

民主主義者としての活動

以上のような推移のなかで特徴的なことは、星島は、い

わゆる保守系の流れのなかでも、つねに革新的、民主主義的立場に位置したことである。加えて華やかさはないが、クリスチャンとして清廉で誠実な政治家としても評価され続けたことも留意されてよい。

例えば、一九二二年に、政界再編の動きのなかで立憲国民党、無所属倶楽部、それに憲政会の一部が革新倶楽部を結成する。同倶楽部は、時代を先導し、今日にも生きる理念や施策を掲げた歴史に残る結社である。日本の民主主義を担った犬養毅、島田三郎、尾崎行雄、古島一雄、植原悦二郎らとともに、星島はその中心の一人であった。普通選挙制、知事の官選から公選への改革、地方自治の拡大、義務教育修学年限の延長、労働・小作問題の弾圧からルールに基づく解決への協調路線、軍縮などが主張・目標であった。その多くは当時の政界の現実や認識水準を大きく超えるものであった。

ほどなくその動きに続くように、清浦特権内閣打倒をめざす活動を契機に始まる第二次護憲運動でも、革新倶楽部は護憲三派の一つとして中心的に動くが、それを機に政友会との合併の道筋も用意される。

また労働運動、小作人運動、社会主義運動、朝鮮独立運動などを抑圧する狙いをもつ過激社会運動取締法案の提案に際しても、星島は、立憲国民党、革新倶楽部にあつて、

その先頭に立って反対運動に力を注いだ。最終的にも未成
立に追い込むことに成功した。このあと大正末に、普通選
挙法とともに、治安維持法が上程される際にも、星島は治
安維持法には真つ向から反対するが、同法の成立は阻止す
ることができなかつた。

さらに戦時下にも、自由と民主主義の立場を守つた。聖
戦遂行・支援の翼賛選挙の時代にも、その流れにストレー
トには乗らず、非推薦候補として立候補、当選を果たして
いる。

その他、女性参政権、廃娼運動など差別される側の女性
の立場や運動にも参加や支援を惜しまなかつた。

戦後の足跡

星島は、戦前・戦中と自由と民主主義の立場・姿勢を貫
いたので、戦争責任とは関係がなく、戦後すぐに前面に出
て、国会中心に政治家として活動を再開できた。大臣に就
任する他、一九五一年のサンフランシスコ講和会議には全
権委員として列席した。このときすでに六四歳であり、以
後、長老として少しずつ政界の表舞台から見えない位置に
身を引くようになる。

それでも、吉田茂首相のワンマン的な体質とはあわず、
地味ななかにも、当時では民主的と受けとめられた鳩山一郎

首相の擁立には積極的に動いた。鳩山とは戦中・終戦直後と
行動を共にしていたが、星島の自由主義的な理念・生き方が
久し振りに明快に表に出て、役立った出来事であつた。

一九五八年、七一歳で衆議院議長に就任する。ただし、
たまたま与野党が激突する警職法(警察官職務執行法)改
正の審議に直面し、立場上与党の要請を受けいれざるをえ
ず、混乱に巻き込まれ、僅か半年で議長職の辞任のやむな
きにいたつた。以後、華やかな表舞台からはすっかり距離
を置くことになつた。白梅学園の理事、さらに理事長に就
任したのは、このような政界を引退した後の時代であつた。
一九八〇年一月三日、星島は惜しまれつつ生涯を終えた。
享年九二歳。長命であつたが、無駄な長生きではなく、日
本の社会にとつては自由と民主主義を実現するために貴重
に必要な九〇余年であつた。

星島の評価

冒頭に、星島は、「一貫して」自由主義・民主主義の立
場で活躍したと記した。戦前日本のように自由主義者・民
主主義者さえ思いのまま自由に、安心して活動できる状況
にはなく、むしろ言論などへの抑圧的な社会・時代には、
自由で民主的な立場は、進歩的・革新的役割を果たすこと
ができた。ところが、戦後のように民主主義の社会・時代

になると、自由も民主も日常化するので、必ずしも目立たない存在・立場に変わってしまう。

星島は、戦後も、大臣、衆議院議長など大役をいくつも担うように、全く片隅にのみいたわけではない。しかし、決して華やかな脚光を浴びる役割を演じ続けたわけでもなかった。政治家としては大いに先見の明もあったが、もともと闘志や派手さを表に出す人ではなかったし、戦後は地味にさえ見える存在であった。

にもかかわらず、岡山の地元の人たちは、戦前の厳しく苦難の多い時代に星島の果たした民衆の側に立った先駆的・進取的役割をいつまでも忘れなかった。活動がそれほど目立たなくなった時も、彼が自ら身を引くまで衆議院議員として国会に送りつづける敬意と尊敬の念は失わなかった。倉敷市も、一九六九年に星島を名誉市民に選定し、その功績を称えている。

私どもも、戦後は当り前になってことさら有難味が認識されなくなった言論の自由、普通選挙、男女平等などの現に、理解者・支持者の多くなかった時代から、先駆的な灯をともし続けた星島の活動・役割を、白梅学園にとつても誇りとして、忘れずに思い起し、再評価しなくてはならないであろう。



昭和4年3月9日、婦人参政権却下の日に
星島二郎の説明を聞く婦選同盟のメンバー

[参考文献]

星島二郎『欧米の社会と婦人』社会教育協会、1936年
日本経済新聞社編『私の履歴書7』日本経済新聞社、1966年
『一粒の麦 一いま蘇る星島二郎の生涯一』廣濟堂出版、1996年

文中の写真は、ご令嬢星野節子様のご諒解を得て、
「一粒の麦」より転載しました。